

エルフさんと魔物倉庫



パリス

エルフの少女。森に住んでおり、たびたび街には買い物にきている。エルフは魔法についての知見と才覚があり、街の雑貨屋の親父はそれを見込んで相談をもちかけてきた——

「エルフ殿お～～っ！」
呼ぶ声に振り向くと雑貨屋の親父が息急き走って来た。
「おや、雑貨屋様。どうされました。」
エルフの少女パリスは、ゼーゼーと息を吐く
雑貨屋の背中をさすりながら彼が落ち着くのを待った。

「実は折り入ってお頼みしたいことが
ありまして……。」

曰く、今度の祭事の露店に
出品する予定だった珍品を
保管していた倉庫が、
魔物達の巣窟になって
しまっているそう。
「妙な魔力を持った魔物達
でして……。魔法に詳しい
エルフ殿なら、なんとかして
いただけるのでは、と。」

「わかりました。解決できるかは分かりませんが、
とにかく見てみましょう。倉庫まで
案内してください。」





「ひゃあっ！」
案内された倉庫の扉を開けたとたん、巨大なネズミの化け物が
パリスの体に覆いかぶさってきた。
「エルフ殿…っ！うわっ」
「雑貨屋様っ！」

雑貨屋の親父は魔物の眼光に射貫かれると
その場を動けなくなってしまった。

（雑貨屋様…！魔力の瞳に
操られてます…！なんとかしないと…）

パリスは魔法を行使できたが、
まさか背中に張り付いた魔物を
魔力の炎で焼き払う訳にも
いかなかった。

（魔力の衝撃波を直接ぶつければ
魔物さんを気絶させられるかも
しれませんが、それだと雑貨屋様も
まきこんでしまいます…、ひゃあっ♡）

パリスが逡巡していると、魔物ネズミは
自身のペニスのパリスの尻に押し付け
コスリ始めた。

（や、やだ…っこの子、私の事
犯そうとしてる…？いやあ…♡
雑貨屋様の見てる前で魔物さんと
せっくすしちゃう…）

やがて魔物ネズミはパリスの膣穴に
狙いをつけると一気にペニスで
貫いた。

「くやあ…っ♡あうう♡そんなあ…♡」

挿入されたペニスに子宮を押しつぶされ
身もだえするパリス。
その様子に雑貨屋は硬直したまま
目を見開いた。

「いやああ…♡雑貨屋様…♡
見ないでくださいい…♡」

そう言われても、雑貨屋としても
魔物に体を操られどうすることも
できず、ただパリスのはだけた乳房
を凝視することしかできなかった。



「はああ♡あんっ♡いや♡はふう♡」
魔物はパリスの子宮をほぐすように
丹念にペニスを押し付けた。
「いやああん♡おちんぽ♡
子宮にグリグリしちゃだめですう〜♡」

魔物とエルフの情交を見せつけられた
雑貨屋の親父も、ペニスをムクムクと
勃起させてきた。

「雑貨屋様っ！？そ、そんな♡
おちんぽお♡ パリスの顔面に
さらしちゃだめですう♡」

「い、いやこれは……。
魔物に操られて……。っ」



「あっ♡あっ♡魔物さん♡ぱんぱん♡らめれすっ♡
おまんこ♡感じちゃいまふからあ♡」

本格的な抽挿を開始したねずみペニスに
犯されているパリスを眺めるしかなかった
親父は、いつのまにか自身の手で
ペニスをつかみオナニーを始めていた。

「雑貨屋様っ？♡んあぁ♡そんなっ♡
パリスの顔面で♡おちんぽシコシコ♡って
オナニーしないでくださいい♡
えっちな先走り汁がぴゅっぴゅ♡って
パリスの顔にかかっちゃってまふう♡♡」

「こ、これはしかたないのですっ。
魔物に操られて…っ
魔物に操られて…っ」



「も、もうだめれふっ♡ 魔物おちんぽで
イクっ♡ イっちゃいますううう~~~~っ♡♡♡」

パリスはビクビクと体を震わせながら果て、
それに合わせて魔物も(親父も)大量の精液を
パリスの体に浴びせかけた。

「あっ♡♡ あああっ♡♡ 精子♡
どろどろのあつあつオチンポ汁♡♡
こんなにいっぱい♡♡ お♡ おう♡
またイってます♡♡
これ以上はダメですう♡♡
中出し赤ちゃん汁も♡
外出しのスケベ汁も♡♡
全部気持ち良くなって
イっちゃいますからあ~~~~♡♡♡」

ひととおり出し終わると、魔物はパリスを引きずって
倉庫の奥へ連れて行こうとした。おそらくそのまま
パリスを肉便器にしようとしているのだろう。

雑貨屋の親父から離れた瞬間、パリスは魔力ショックをネズミに浴びせかけた。ネズミを気絶させ何とか難を逃れたものの、慌ててためか魔力をいっきに放出しすぎてしまった。

エルフにとって魔力切れは死を意味した。

「はぁ・・・、はぁ・・・。
何かで魔力を補給しなくちゃ・・・。」

そんな弱ったエルフに襲い来る次なる魔の手は植物のツタだった。

倉庫に保管されていた何らかのタネが魔力を浴びて意思を持ち急成長した魔物である。パリスはそんな蔦に絡めとられ天井付近にまで持ち上げられてしまった。

「くぅ・・・っいけない・・・っ
もう戦える魔力も残ってないのに・・・っ
！・・・あれは・・・マナの実っ」

ぱりすが目を付けたのは植物の蔦に付いた瘤のような突起物だった。植物が大量の魔力を吸収した際に飽和した魔力が木の実のような形で表面にできあがる。それをエルフ達は『マナの実』と呼んでいた。あれを体に取り込むことができれば、失った魔力を補うことができるはずだ。



「植物さあ〜ん♡こっちですよお♡あなたのおっきなマナの実♡
パリスに食べさせてくださあ〜い♡」

パリスはなんとか植物を魅惑
することでマナの実を
手に入れようとしていた。
残された魔力でフェロモンを
生み出し、全身から
放出させる。

なるべく据え膳状態を
作り出すため自ら発情し
全身で受け入れ態勢を整える。

「お願いしますっ♡ パリスの
雌穴に♡ 魔力注いで下さい♡
こ、これ以上待たされると、
か、体がっ♡
勝手にイっちゃいましゅっ♡♡
発情させすぎて、何もされてないのに
いきつづけるエロエルフに
なっちゃいましゅっ♡♡♡」

ふしゅふしゅと何度も絶頂汁を
浴びせかけながらも、
ついに薦に彼女の性器に注目
してもらうことに成功した。

「パリスのお便所穴に、いっぱい魔力
排泄してください♡」

「んあああああっ♡♡ そんにゃトコロまでえ〜〜〜っ♡♡♡♡」

鳶はパリスの膣穴どころか、肛門や
乳首にまで挿入され、激しく抽挿しだした。

「んにゃっ♡ はん♡♡♡
まんこもおっ♡ウンチ穴も♡
乳首も♡ぜーんぶ気持ち
イいなんてえ〜〜っ♡♡
おかしいですっ♡
おかしくされますっ♡
狂っちゃいましゅ〜〜〜っ♡♡
こんなじゃパリス、もう
街で生きていけない変態さんにな
っちゃいましゅ♡
森に引きこもって
乳首やうんち穴にぶっとい棒を
詰め込んでグボグボ
オナニーするしか脳の無い
変態ダメエルフになっちゃい
ますう〜〜〜〜〜っ♡♡♡♡」



「んあああああ♥♥♥♥ 出して♥出して♥出してえ〜♥♥♥♥
変態エルフのダメ穴♥マナ汁で満たしてえ〜〜〜っ♥♥♥♥」

どびゅどびゅぼびゅっ♥

「ほおおおお〜っ♥♥♥♥
マナ汁♥体突き抜け
ます〜〜〜っ♥♥♥♥
パリスの全身おまんこ穴が
マナ汁ごくごく♥
満たされていきます〜っ♥♥♥
し、しあわせでしゅ♥♥♥
イキまんこ壺になった
パリスの雌穴達が
うれしい♥うれしい♥って
それぞれ幸福絶頂
しちゃってましゅ♥♥♥♥」





「ほおお♡♡おほっ♡いっぱいマナ汁
飲ませてくれて、ありがとうございました……♡」

取り込んだ魔力の分だけぼってりと
膨らんだ彼女の体を、植物は
ゆっくり地面に落とした。

どうやら彼ら(?)と
和解できたらしい。
植物たちはパリスに蔦を
擦り寄せると、残りのマナ汁も
ドピュドピュと彼女に
注いでくれた。

パリスは擦り寄ってきた蔦の
ひとつにキスすると言った。

「パリスの事、変態さんに
してくれてありがとう
ございます♡」



雑貨屋からは、祭事に扱う珍品は倉庫の最奥に眠らせていると聞いていた。
奥の小部屋に入ると積まれた箱の上の、壊れたビンが目にとまった。

「おそらくこれですね。割れた容器からでも
大きな魔力を感じます。中身は
どこでしょう・・・。」

魔力が生物を魔物に変化させる。
倉庫内の魔物達もおそらくコレ
から発せられる魔力を浴びて
変化した者だろう。

パリスが屈みこんで床を
調べようとしたとき、
天井から大きな蜘蛛が
パリスの尻肉に
張り付いてきた。

「ひゃんっ♡こ、この子・・・。
マセキフクログモ・・・っ
そうか・・・、
この子が・・・。」

マセキフクログモは魔水晶の洞窟に住み、腹に膨大な魔力を溜め込み
魔法を行使するという。瓶に入っていたのは生け捕りにされたこの蜘蛛だったのだ。

その蜘蛛が今、パリスの尻肉に取り付き、彼女の発情しきったアナルに
毒牙を差し込んできた。

「ふぁ！？♡らめれすっ♡
パリスのウンチ穴は今、アクメ肉壺に
なってるんれすからぁ♡♡♡」

蜘蛛はそんなことはおかまいなしと
パリスのアナルに毒液を
注入しはじめた。

「私の事食べる気なんですかぁっ♡
違う…、この毒液はっ♡
発情期に出す、雌を無理矢理
自分のモノにしちゃう毒う♡♡
おっ♡ おほおっ♡
体が♡フクログモさんのお嫁さんにな
りたがっちゃいますっ♡♡
そのおててに付いてるぱんぱんに
膨らんだ精包♡ まんこに
ブチ込んでください♡って
パリスのまんこ穴が
言っちゃってます♡♡♡」



「ふぁ♡ ふぁあっ♡ ほ♡ ほひいっ♡
蜘蛛さんの触肢があ♡ 交互にっ♡
パリスのマン肉ぶちゅぶちゅっ♡って
潰してますうっ♡♡
子種の詰まった精包に
まんこ丹念に慣らされて♡♡
まんこも絶対受精してみせます♡って
意気込んでますう〜♡♡♡♡」



「んほっ♡ んおおおおおおお～～～っ♡♡♡♡
精包が一番奥まで二つ同時にいい～～～っ♡♡♡♡
強すぎて絶対に孕みますっ♡♡♡♡
お願いしますっ♡♡ このまま
おまんこ蓋してください♡♡
全部の精子で受精して
いっぱい赤ちゃん蜘蛛
産みたいですから～～～っ♡♡♡♡」



「お♡ おひっ♡ うそ...♡ ほんとに♡
子宮に精包埋め込まれちゃいまひたあ〜〜〜♡
し、しかもこの精包さん♡
卵巣めがけて一定間隔でぴゅっぴゅ♡
ぴゅっぴゅ♡って子種汁送り込んで来ますう♡
毒液の効果で急速に卵子作りまくってる
だらしない卵巣ちゃんにそんな
種付け攻撃されたら、五秒に一回
赤ちゃん孕むだけの、子作りマシーンに
なっちゃいますう♡♡♡」

一方、役目を終えたオスの
マセキフクログモは、
パリスの尻肉に張り付いた
姿勢のまま息絶えていた――。





「おおっ！エルフ殿！ご無事でしたか！
心配しておりましたぞっ」
倉庫の入り口では、雑貨屋の親父が
せわしく待ち構えていた。

「は、はい♡ なんともありません♡
魔物が現れた原因はマセキフクログモの
瓶だったようです。」

今も一定間隔ごとに
受精アクメを
繰り返すパリスの姿は、
どうみても無事では
なさそうだったが、
親父は言及しないことにした。

「魔力あるものを扱う時は…あふんっ♡
くれぐれも慎重にお願いしますね。」
「は、面目ない…。」

呆然と応える親父に一礼すると
パリスはおぼつかない足取りで
街を後にした。

（この子たちの住処は魔水晶の洞窟…♡
あそこで産卵してあげなくちゃ♡♡）



おしきに♡

— 奥付 —

タイトル: エルフさんと魔物倉庫

作者: handa

サークル: Fの部屋

メール: fnoheyakara@gmail.com

































